Festival Night

清鳳学園の学園祭は、秋ではなく、創立記念日にあわせ毎年６月中旬に開催される。
４月に入るとすぐ、創立祭の準備に取りかかるのだ。新入生にとっては高校生活最初の大きな行事となり、３年生にとっては、本格的な受験シーズン突入前の最後の行事と言える。

創立祭前日、クラスメイトと一緒に屋台造りをしていた瀧川は、蒸し暑さに辟易し、ジャージの上着を脱いだ。

昨日まで雨が続いたため、屋台の完成が今日にずれこんでしまっていた。ようやく目処はついてきたものの、時間は限られており、あまり余裕はなかった。

クラス替えのないこの学園では、三年生になってもクラスの顔ぶれは変わらない。
同じメンバーで三回目の学園祭ともなれば、企画から片付けまでの役割分担は慣れたものだ。
一年次のお化け屋敷はやや準備不足だったが、二年次のシェイクスピア喜劇はかなりのクオリティだった。今年はさらに早い段階からたこ焼き屋台を出すことに決まっており、誰が何をするかも的確に割り当てられていた。

汗を拭い、再び作業に戻った瀧川は、背後に人の気配を感じて、釘を打っていた手をとめる。
ゆっくりと振りかえると、陽光を眩しく跳ね返す白い色が目に飛び込んできた。思わず目を細める。

「大工道具が似合うな、瀧川？」

そう言って艶然とほほえんだ相手の格好を見て、瀧川は思わずトンカチを自分の足の上に落としそうになる。
慌てて柄を握り直し、眉をひそめた。

夏服の上に羽織った白衣。普段はかけないフレームの細い眼鏡をかけ、ご丁寧に、首から聴診器まで下げている。
Tシャツ姿で汗だくになっている瀧川とは対称的に、涼しい顔でそこに立っているのは、保健室の先生…ではなく、クラスメイトの山崎桂である。

「…なんのコスプレだ？」

「放送委員で、お医者さんカフェやるんだよ。いまは衣装合わせ兼、宣伝活動中」

「お医者さんカフェ…なんだその破廉恥な設定は」

　瀧川は呆れた。伊達眼鏡を外しながら、桂は肩をすくめる・・・・